

ロックの一次・二次性質

—パークリーの批判に答えて—

青木 滋之

0. はじめに

ロックが『人間知性論』2巻8章で展開した物体の一次・二次性質の区別は、パークリーによって先鋭な批判が浴びせられて以来、現代に到るまでロック研究者の間で論争的となり続けている。その論争には「一次・二次性質の区別の本性は何か」という、性質問の区別への正攻法的なアプローチが当然ながら最も頻繁に見られるが²、哲学史という観点から見て重要な関心事となるのは、果たしてパークリーによるロック批判は妥当なものだったのか、という論点であろう³。そこで哲学史に目を向ければ、パークリーによるロック批判は、経験論を徹底させた透徹した議論である、というのが専らの定説ないし評価である。そこでの議論の仕方には若干の違いが見られるものの、大枠において、パークリーの批判はロックの弱点を射抜いたものとして高く評価している点で一致しているのである。そうした哲学史の記述においてロックは、サンドバックのような役割一つまり、哲学的な反論の練習の場としてのみ機能するような—そうした役割を演じる者として描かれ続けてきた。しかしながら、近年に到りロックと当時の自然哲学者たちとのロックの関係が論じられるにつれ、こうしたステレオタイプ化されたロック像に対して様々なロック研究者たちから疑念が提出されてきている。そういった諸研究が主張するのは、ロックを後世に生きたパークリーから読み取るのではなく、彼が生きていた当時の自然哲学のコンテクストに正しく置きなおして解釈する必要があるという点⁴である。もしこのロック擁護が正しいものだとするならば、パークリーのロック批判は再解釈の必要性が迫られているように思える。本論は、教科書的なパークリーによるロック批判が妥当でないことを論じ、ロックの性質理論を浮き彫りにすることで、これまでのロック像の改訂を図ることを目標としている。

1. “教科書的な” 一次・二次性質の区別

まず初めに、これまでの教科書的な一次・二次性質の区別の解説を紹介したいと思う。私はここで、一般的な性質間の区別を“教科書的な”の区別と呼ぶことにする。なぜなら、私たちが通常（例えば院試に備えて）哲学史を学ぶときに、まず殆どの哲学史の教科書においてと言って良いほど、出くわす記述であるからである。その代表的な記述は、次のようなものであろう。

さらにここにはもう一つ、第一性質と第二性質の区別の解消という哲学上の問題がからんでくる。ロックは、物体に直接具わっている性質として、延長、形、運動、数、固性などを挙げ、これらを物体に内在する第一性質 (primary qualities) と呼び、色、音、香、味などの人間の感覚経験との関わりで生じる第二性質 (secondary qualities) から区別した。だが、バークリーのように考えれば、物体の性質はすべて人間の心の働きとして生じる内的経験の産物であって、経験を離れて物にはじめから固有のものとする必要はなくなる。実体と属性という古来からの問題に関し、ロックは自らの立場で二様の関係を設定したのだが、バークリーはそれを明快に割り切る答えを見つけたのである⁵。
(下線は筆者による強調、以下同様)

こうして、教科書的な性質間の区別とはおよそ、「ロックは客観的に物体に内在する形、大きさ、運動などを一次性質と定義し、人間の主観に現れる色、音、匂いといった二次性質から区別した」という形で一般的に流布されている⁶。ちなみに、こうした記述は日本の哲学史の教科書だけに見られる特徴ではない。代表的な哲学史の叙述とされるラッセルの『西洋哲学史』にも、酷似した記述を私たちは見出すことができる。

ロックの正当な意見だけでなく、誤りまでもが実際には有用ではあった。例として彼の一次性質と二次性質に関する教説を取り上げてみよう。一次性質とは物体から分離不可能な性質だと定義され、固性、延長、形、運動ないし静止、数が挙げられる。二次性質とは残りすべての、色、音、匂いなどである。ロックの主張によれば、一次性質は実際に物体の中にあるものであり、

それとは反対に二次性質は、ただ知覚者の中の中にのみ存する。目がなければ色
は存在せず、耳がなければ音は存在しない、等といった風に。ロックの二次
性質に対しては、十分な根拠—黄疸(おうたん)、青メガネといったもの—が
ある。しかしパークリーは同じ議論が一次性質にも当てはまることを指摘し
た。そしてパークリー以来、ロックのこの点に関する二元論は哲学的に時代
遅れなものとなった⁷。

こうして、“教科書的な”一次・二次性質の記述は共通して、ロックにおける性
質間の区別の不徹底さを指摘し、パークリーによる一次・二次性質の区別の克
服を、哲学史における前進と捉える。それはラッセルが宣告しているように、
「ロックにおける一次・二次性質の二元論は時代遅れ」という言葉によって端的
に言い表すことができるだろう。不徹底なロック、そしてそれを見抜き議論を
徹底させたパークリー。こうした図式は、まず支配的な見方と言ってよいだろ
う。

2. パークリーによる批判(1) 観念の心一依存性

こうして、哲学史における前進として評されるパークリーによるロック批判
とはいかなるものなのだろうか、その点をより詳細に検討していきたい。ただ
し、パークリーによる一次・二次性質の区別に対する批判は、小論で検討を加
えるには手に余るほど多岐に渡っている。そこで本論では、その中から本論と
関係する2つの論点を取り上げて論じることにする。

まず第一の論点として挙げられるのは、パークリーの一次・二次性質批判の
中核を成す、「心の中の観念」にかんするテーゼである⁸。この点にかんして、
パークリーは『人知原理論⁹』で次のように主張している。

一次性質と二次性質とを区別する者がある。彼らは、前者によって延長、
形、運動、静止、固性ないし不可透入性、数を意味し、後者によってすべて
の他の可感的性質を、例えば色、音、味などを指表する。[...] しかし、す
でに示されたことから明白だが、延長、形、そして運動は、心のうちに存在
する観念にすぎなく、そして観念は他の観念に似ることができるだけである。

それゆえ「延長、形、運動の」どれも、またその原型も、知覚しない実体のうちに存在することは不可能である。(Principles, Part I.9, p.105-6.)

パークリーが主張しようとしている点は明らかであろう。もし、知覚経験によって私たちは事物についての観念を得るようになるという、観念経験論を徹底するのであれば、知覚されないものは存在しないことになる。例えば、テーブルの存在について考えてみよとパークリーは言う¹⁰。私たちが「テーブルが存在する」と主張するのは現に私たちがテーブルを見たり感じたりして知覚しているからである。そして部屋から出てしまった後にも「テーブルは存在する」と私たちが言うことがあったとしても、それは、もし我々が部屋から出なかったらテーブルを知覚していたであろう、と意味しているにすぎない。これと同じく、ロックが一次性質を物体自身に内在する(知覚から独立して存在する)と言ったとしても、そうした主張は「もし私がその物体を知覚すれば、かの物体から特定の大きさ、形、運動、そして固性を視覚と触覚から得るだろう」と主張することと同値である。

また仮に、ロックが私たちの観念を、外界の事物の像(pictures)ないし表象(representations)として扱ったとしても、そうした外的事物は我々に知覚されているのであり、それは心の中の観念であることから、「私たちの論は勝利を収める」とパークリーは宣言する¹¹。こうしてパークリーは、知覚とは独立の存在を有するとされる、物的実体(corporeal substance)ないし物質(matter)という想定そのものが、その内に矛盾を孕むものであると結論付ける。

パークリーの批判の要点はどこにあるのであろうか。それは一言で言えば、ロックの語る一次性質も、二次性質と同じく心の中に存在する観念であるという点である。この点をより明確にするために、パークリーによる性質の分析を見てみることにする。さて、パークリーによれば、二次性質と一次性質は不可分の関係にある。テーブルを例に挙げれば、果たして私たちは、色(二次性質)なしで形(一次性質)を思い浮かべることができるだろうか。つまりあの、テーブル固有の木の色なしで、木の形だけを想う(conceive¹²)ことができるのであろうか、とパークリーは問う。この問いは一般化すれば、「色がない延長は存在するのか」という問いに還元されるだろう。そしてパークリーは、この問いに対して否定的に答える¹³。

私は明白に知るのであるが、延長し運動させられる物体の観念を形成することは私の能力(power)になくて、心のうちにのみ存在すると承認される色や、その他の可感的性質を同時に附与しなければならないのである。要するに、他の一切の可感的性質から抽象された延長、形、運動は、想うことができない(inconceivable)。それゆえ、他の可感的性質のあるところ、そこにこれら[延長、形、運動]も存在しなければならない。すなわち、心のなかにあつて、それ以外のどこにも存しないのでなければならない。(Principles, Part1.10, p.106.)

ここでのパークリーの主張に端的に見て取れるように、二次性質は一次性質と分離させることができない。私たちが延長について想い浮かべるとき、そこには何らかの色が存在する。そしてロックが二次性質において認めているように、色は心の中にしか存在しない。よって、色と不可分な一次性質も心の中に同様に存在する、という段取りになる。

3. パークリーによる批判(2) 知覚の相対性から

次に第二の論点として、一次・二次性質の区別にかんして教科書的記述でも言われていた「事物に内在する性質」と「事物に内在しない性質」との境界に、区別の基準を訴えることは可能なのではないか。こうした観点から、ロックの主張を好意的に受けとる戦略を考えてみる。さて、一次性質とは、ロックのある箇所¹⁴の定義によれば、「物体から不可分な性質」のことである。つまりは物体に本質的な性質であり、いかなる物理的変容を受けようとも、私たちの感官が常に見出す性質ということになる。ここでは、ロックが例として取り上げる小麦の例を考えてみよう。ロックは大まかに次のように主張する。小麦には大きさ、形、可動性(動かすことができる性質)、固性(他の物体の侵入を妨げる性質¹⁵)などが備わっている。では、この小麦を半分に分割したらどうか。やはり大きさ、形、可動性、固性を有する。さらに、我々の裸眼では見えなくなるまで分割を続けてみる。それでも、小麦には大きさ、形、可動性、固性が備わっているものと考えざるを得ない。なぜなら、分割という操作はこれらの

性質を奪うことができないからである。もし特定の分割点において大きさ、形、可動性、固性が小麦から突如奪われると真面目に主張するなら、その者はその特定点における急激な質的な相違を論証しなければならない。しかしそれは困難なように思える。

我々はここで、分割という物理的変容を考察してみたが、一次性質とは、ロックの上の言い方からすれば、物体の本質と言える性質、つまりいかなる物理的変容を受けようとも物体が常に有する性質で、それらがなくてはある物を物体とは呼ぶことのできなくなるような、そうした性質のことなのである。

他方、二次性質の扱いはロックにおいてはどのようなのであろうか。一次性質は物体に本質的（内在的）と言うからには、二次性質は物体に非本質的（非内在的）な性質とロックは主張しなければならないだろう。この点を示すためには、ロック自身が挙げている有名な例を挙げれば足るように思える。

〔一次性質と二次性質の〕観念をこのように区別して理解すれば、我々は同じ水が同時に、どのようにして一方の手で冷たいという観念を産み出し、他方で熱いという観念を産み出すのかを説明できるだろう。一方、仮にもしこれらの〔冷たい／熱い〕観念が水のうちに真実にあったとしたら、同じ水が同時に熱くかつ冷たいということは不可能である。（Essay, 2.8.21）

ロックが述べているのは、意識することは少ないが、私たちがよく経験するような現象である。例えば、冬に片方の手が冷たく、もう片方の手が温かいと、同じ真水に手を入れても左右の手で違う温かさが感じられることを私たちは経験することがある。こうした知覚の相対性は触覚による温度だけでなく、味覚による味や聴覚による音、嗅覚による匂いなどにかんしても言える。味にかんして言えば、例えばガムを噛んだ後にコーラを飲むと、普通にコーラを飲むのとでは違う味がする。音についてはどうか。騒音を聞いた後では他人の言っていることは聞こえづらいが、静かな森の中ではちょっとした物音が敏感に聞き取れる。わさびを嗅いだ後では、普段嗅ぎ取れる匂いが嗅ぎ取れなくなる。こうして、二次性質は知覚者の置かれた条件により相対的に変化をきたす。二次性質は、物そのものに内在する性質というよりも、知覚者に相対的に属する性質だと考えられよう。

このように、「物体に内在する一次性質」「物体に内在しない二次性質」という対比は成功するように一見して思える。だが、パークリーはこのような対比が成り立たないことを示す強力な議論¹⁶を展開した。一次性質（大きさ、形、運動など）についても、知覚条件により相対的に現れることを彼は指摘するのである。

要するに、誰でもよいから、色や味が心の中だけに存在することを明らかに証明すると考えられる様々な議論を考察してもらいたい。そうすれば、その人は見出すであろうが、延長や形、運動についても等しい力で同じことを証明してしまうことになるのである。 (Principles, Part I.15, p.108.)

パークリーの主張しようとする点は明らかであろう。ロックが物体そのものに内在すると論じた大きさ、形、運動などの一次性質も、知覚者の位置や状態に相対的であり、その意味で二次性質と同じ身分となる。したがって、一次・二次性質の区別は不可能であるとパークリーは主張しているのである。例えば、同じテーブルも見る距離や角度を変えたりすれば、その一次性質が相対的に現れるというのは紛れもない事実であるから、私たちは彼の主張を認めざるを得なくなる。

4. ロック再解釈の手掛かりー自然学的考察

こうして、ロックの一次・二次性質の区別はパークリーによって完全に論駁され、哲学史の教科書の記述においては、全く見返る価値のない議論として葬り去られてきている。しかしながら、このようなロック理解に対して、これまでに幾人かのロック解釈者たちによって疑念が提出されてきている¹⁷。こうした新しいロック解釈の新しい鍵となるものは、ロックの一次・二次性質の二分法を伝統的な哲学の知覚の問題（観念の分析）ではなく、科学哲学に属するものとして考察するような視点である。それは小論に即して言えば、一次・二次性質の区別を導入する『人間知性論』2巻8章において、ロックは当時の自然哲学の状況（ロバート・ボイルといった原子論者の言説）を念頭に置き、現象レベルの記述、ロックで言うところの「記述という平易な方法(Historical, plain

Method)¹⁸』という現象主義を越えて、現象の原因を、現代の言葉で言えば物理学的、生理学的に探究するレベルに踏み入ったことを論じることを意味する。こうして、ロックの性質理論とは、専ら自然学的考察にかかわるものなのであると私は主張したい。それでは、ロックが自然学的考察に踏み入ったことを指摘することで、パークリーの批判がどのように無効なものとなるのか。ロックがその観念説を、広義の観念説（直接实在論）から狭義の観念説（知覚表象説¹⁹）へと移行させていく様と重ね合わせて描き出していくことにする。

ロックはまず、『人間知性論』で彼の観念説を開始させるにあたって、その冒頭付近で、観念を次のように定義している。

この観念という言葉は、人間が思考する際に、知性の対象であるものは何であれ、それを表すのに最も役立つであろうと私は思う名辞なので、私は心象(Phantasm)、思念(Notion)、形象(Species)によって意味されるもののいっさいを、すわなち、心が思考する際にたずさわることのできるいっさいを表現するために、この観念という言葉を用いてしまい、頻繁に用いることを避けられなかったのである。（Essay1.8.8）

引用で言われているように、ここでのロックの観念説は「知性の対象であるものは何であれ」、すべての知性の対象を考察の対象としている。実に広範な領域をカバーするものと考えてよいだろう。よって私はこの観念説を、広義の観念説と呼ぶことにする。しかしロックはこの広義の観念説を用いて現象を記述していくにつれて、直接实在論的な発想では処理しきれない現象が存在することに気付いていく。3. で挙げた知覚の相対性を示す事象がそれである（同じ真水が両手で違う温かさで感じられる、つまり同じ真水が同時に温かく冷たい、といった現象など）。よってロックは自然学的考察、つまり観念の原因についての考察によって直接实在論を乗り越えようとするのである。ロックにおける観念の原因の探究とは、例えば白さの観念と黒さの観念が、どのような物理的な違いにより心の中に現れてくるのか、その生成メカニズムを明らかにするための探究のことである。ロックはその点にかんして、次のように述べている。

このようにして、熱いと冷たい、明るいとか暗い、白と黒、運動と静止の観念は、等しく心の中にある明晰で肯定的な観念(positive Ideas)である。だがおそらく、これらの観念を産み出す原因のいくつかは、我々の感官がこれらの観念を得てくる主体においては、単なる欠無である。知性はこうした観念を眺めるさいに、すべて別個の肯定的な観念として考え、それらを産み出す原因については注意することがない。これは、知性の中にあるものとしての観念にかんする探求ではなく、我々の外にある事物の本性にかんする探求である。これら 2 つは大変違ったことであり、注意深く区別されるべきである。

(Essay2.8.2)

知性の中にある明るさと暗さの観念はともに肯定的な現れをするものであるが、暗さはおそらく、外界の原因にあたる光（の粒子²⁰）が欠無することで生じる観念であるとロックは考えていた。ここでは全く異なる次元の2つの方法論が語られていることに注意しなければならない。1 つには、肯定的な観念の現れに注意する、記述的な方法による手法である。もう1つは、こうした単なる現象を越えて、その原因を推測する自然学的探究である。そして、ロックは「これら2つの探究は大変違ったことであり、注意深く区別」するように警告しているのである。言い換えれば、これらを混同してはならない、ということである。観念の記述は心の中の現れに対してであり、自然学的探究は心の外の事物にかんして行われる。この区別がロックの性質理論の前提としてロックの念頭にあることは、理解しておかねばならないだろう。

5. <心における観念>と<物体における性質>

こうした自然学的考察を通じて、ロックは性質理論を展開するにあたって彼の広義の観念説を改訂するに到る。その本質は、知性のあらゆる対象である観念を、<心における観念>と<物体における性質>とに峻別する点に存する。

観念の本性をさらによく発見し、そして観念について理解できるように論議するために、観念を、我々の心の中の観念ないし知覚としての観念と、そうした知覚を我々の中で引き起こす物体の中における、物質の変容としての観

念とに区別することが便利であろう。(Essay2.8.7)

こうして、＜心の中の観念ないし知覚としての観念＞と＜物体の中における、物質の変容としての観念＞という対比を意識しつつ、ロックは自身の（広義の）観念を再定義し、狭義の観念説を採用するに到る。

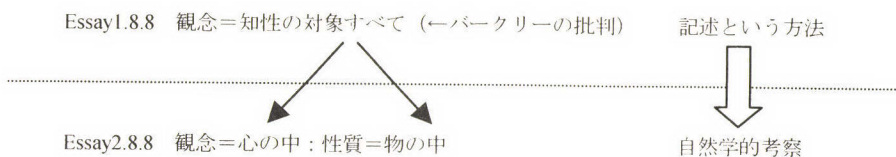
心がそれ自身の中で知覚するもの、つまり、知覚、思考、知性の直接の対象 (the immediate Object of Perception, Thought, or Understanding)であるものが何であれ、それを私は観念と呼ぶ。そして、我々の心の中で観念を産み出す能力(power)を、私はこの能力が存する主体の性質と呼ぶ。(Essay2.8.8)

ここでの「知性の直接の対象」という言い回しに私は注目したい。「直接の対象」という言い回しは、それとは対比的に、間接的な対象があることを私たちに示唆するものである。この直接／間接の対比は、次のような事態を考えれば納得いくだろう。私たちが白さや黒さを知覚する時、それらを我々は間接的に推論することによって知覚するのではなく、直接知覚しているのである。眼を開ければ否応なしに白さや黒さが直接知覚される。触れば水の冷たさやお湯の温かさは直接知覚される。こうした、知性の直接の対象を観念とロックは呼んでいる。しかしそれとは対照的に、推論上の、間接的に知覚されるもの（例えば白さや黒さの観念を引き起こす心の外の、ロックがこの時代に念頭に置いていたものとしては、知覚不可能な光の粒子にあたるもの）は直接知覚されることがない。よってロックは、こうした「白い」「黒い」といった肯定的な観念を越えた、自然学的考察における間接的、推論上のレベルでの対象を性質と呼んでいるのである。こうして、ロックの性質理論は、知覚レベルの分析ではなく、その知覚を産み出す物理的メカニズムに専ら関わるものなのである。

では、性質は観念とどのように関係するのであろうか。下の引用(2.8.8)では、「我々の心の中で観念を産み出す能力を、私はこの能力が存する主体の性質と呼ぶ」と言われた。ここから、物そのものが有していると推測される性質は、私たちの心の中に観念を「産み出す」役割を担わされることになることが分かる。例えば、私たちの形の観念は物の一次性質によって産み出され、白さの観念は、物体が持つ二次性質によって産み出される、といった具合にである²¹。

上の引用 (2.8.7) では、この点がより明確に語られている。「知覚を我々の中で引き起こす物体の中における、物質の変容としての観念」とは、物体の性質のことを指しているが、このようにして、物体の性質は因果的²²に作用し、そして心の中に観念を産み出す。性質は因果的に観念を引き起こす、この関係が成り立つことになる。

しかしながらここで、いかにして私たちは間接的な対象 (= 性質) について語ることができるのか。はたして、そのような事はそもそも可能なのか。こうした問いが当然ながら生じてくるだろう。しかしながらロックは、広義と狭義の2つの観念説を用いることによって、この難問を解消しているように思える。2つの引用で、ロックは明らかにそうした作業を行っているものと理解することができる、というのが私の考えである。こうした私の考えを、テキストに沿って示していきたい。さてロックは、2.8.7の引用で、「我々の心の中の観念ないし知覚としての観念と、そうした知覚を我々の中で引き起こす物体の中における、物質の変容としての観念」の2つに観念を分けることを提案している。これは文字通りに取れば、明らかに矛盾した言い方であろう。なぜなら、観念とは心の中にあるものと主張する一方、また同時にそれが「知覚を我々の中で引き起こす物体」、つまり心の外にある外界の事物でもあると引用箇所は述べているからである。私たちはこの点にかんして、2. で確認したパークリーの批判を思い出す。外界の事物も知覚されているという点で心の中にあり、我々の論は勝利を収めるとパークリーは宣告していたのである。しかしながら、こうした批判は、ロックの主張の積極的な部分を軽視してしまっているように思える。確かに、パークリーの主張する意味では、性質も心の中の観念である。しかし、それは広義の観念であって、決して狭義の観念ではない。私たちは、「知性のあらゆる対象」である広義の観念の中から選択的に、心の外の物へとある種の観念を帰属させることができるからである。そして、その外界の物が因果的に私たちに作用し、脳に位置する心の中で観念を引き起こすことを考えることも可能である。ここでの図式はやや複雑であると思われるので、簡単に図示することで、私の意図するところをより明確にしたい。



初めの広義の観念説においては、知性の対象すべてが観念であると認められた。この時にはロックは自然学的考察を念頭に置いておらず、観念は心の中／性質は物の中という区別は成り立っていなかった。だがしかし、知性の対象を平易に記述していくという方法から抜け出て、その原因を自然学的に考察する時点に移行すると、私たちは、これまで得てきた（広義の）観念によって、外界の事物を記述していくしかない。ロックは心の外には粒子からなる世界が広がっていると考えており、それらの粒子は一次性質（大きさ、形、運動、固性など）しか持たないことが仮説上想定される。これらの一次性質による粒子の記述は、私たちが粗大な事物から得た一次性質の観念を基に展開されていくのである。

6. ロックによる一次・二次性質の区別

こうして、ロックによる一次・二次性質の区別とは、観念レベル（現象レベル）における区別なのではなくて、それとは違う次元の、観念生成の原因を説明する理論的な自然学的考察から要求されたものなのであることが明らかになったものと思う。よって、ロックの性質理論において重要な争点となるのは、パークリーが論じる、知覚の分析レベルにおける問題というよりも、むしろ、科学理論の成否を論じる場合の問題である。より具体的に言えば、その性質理論は観念の生成原因を説明することができるか、そしてその説明は分かりやすいものか、また、ある限られた現象だけでなく私たちが経験するすべての知覚現象と矛盾をきたすことなく、現象の原因となるメカニズムを首尾よく説明することができるか、こうした点²³へと争点は移行していくはずである。このようにしてロックの性質理論を理解すれば、パークリーの批判がロックの意図とは外れていたことが明らかになるだろう。パークリーは小論2、3、で確認したように、観念の心一依存性や観念の相対性から一次・二次性質（の観念）の区別を批判していたが、これらは専ら観念レベルの分析であり、性質－観念の

関係を念頭においていたロックの一次・二次性質の区別とは独立に成り立つ議論であるからである。

よって私たちは、ロック自身の一次・二次性質の区別の本質を、物体の二次性質が一次性質によって生成される、とロックが主張している点に求めなければならないだろう。この私の主張を傍証する箇所は、8章10節である。

第二に、本当は事物自身の中にあつては、その事物の一次性質によって、すなわち、事物の感覚できない諸部分の高、形、組織、そして運動によって、色、音、味といった様々な感覚を産み出す能力にすぎない性質である。これを私は二次性質と呼ぶ。(Essay2.8.10)

ここに見られるように、二次性質は、一次性質に基づいていることが明らかにされている。「一次性質によって」の箇所がそうした事態を指しているのは明白である。

7. 結び ロックの性質理論の理解に向けて

こうして、ロックの一次・二次性質の区別は知覚の分析からではなく、先行するボイルといった自然哲学者の科学理論の文脈から押さえないといけないことが示されたものと思う。私たちは、ロックが性質理論を展開する時には、その背後に膨大な当時の（例えばボイルの）自然哲学、自然誌が潜んでいることを思い起こし留意することが求められているのである。この点が小論の積極的主張ないし結論であり、その事が理解されれば小論の目的は達せられたことになる。

註

¹ ロックからの引用は次のテキストから行い、本文における引用では巻・章・節を数字で Essay1.2.3 のように示した。An Essay Concerning Human Understanding, ed. by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, 1975

² 代表的なものだけでも、Jackson, Mandelbaum, Mackie, Alexander といった論者たちがそれぞれ異なった形で性質間の区別を論じている。ただし小論はページ数の関係上、検討する機会を持てなかったことを付言しておきたい。この点についてはいつか機会があればしっかり論じたいと考えている。Reginald Jackson, “Locke’s distinction between Primary and Secondary Qualities,” in *Locke and Berkeley*, ed. by C.B.Martin & D.M.Armstrong, Macmillan, 1968, p. 55.; Maurice Mandelbaum, *Philosophy, Science and Sense Perception*, John Hopkins Press, 1964, p. 21.; J.L.Mackie, *Problems from Locke*, Oxford University Press, 1976, chapter 1 “Primary and Secondary Qualities”; Peter Alexander, “Locke on primary and secondary qualities,” in *Locke on Human Understanding*, ed. by I.C.Tipton, Oxford University Press, 1977, p. 65.

³ バークリーの批判が妥当であるか否かを論じる代表的な論文には、Margaret D.Wilson, “Did Berkeley completely misunderstand the Basis of the Primary-Secondary Quality Distinction in Locke?”, in *Berkeley: Critical and Interpretive Essays*, University of Minnesota Press, 1982, pp. 108-23., reprinted in *Berkeley: Critical Assessments*, vol. 2, Routledge, 1991 を参照されたい。

⁴ この点を主張する代表的な論文としては、Laurens Laudan, “The Nature and Sources of Locke’s Views on Hypothesis,” in *Locke on Human Understanding*, p. 149. を参照されたい。

⁵ 『西洋思想のあゆみーロゴスの諸相』、有斐閣出版, p. 214.

⁶ ちなみに、次の（よく知られていると思われる）テキストも同様の主旨を論じている。『哲学とは何か』、勁草書房, p. 54.; 『テキストブック西洋哲学史』、有斐閣ブックス, p. 111.

⁷ Bertrand Russell, *History of Western Philosophy* (1946), Routledge, 1993, p. 585.

⁸ ちなみに『対話』においても、この論法によってフィロノウスはハイラスを追い詰めることになる。「ハイラス：素直に認めるよフィロノウス。これ以上主張しても無駄だ。色や音、味、つまり一言で言えば、二次性質と呼ばれるものすべては、心なしでは存在しない。（・・・）フィロノウス：だがね、もし二次性質に向けられたのと同じ議論がこれら〔一次性質〕にも有効であるとしたら、どうするかね。」（*Dialogues*, pp. 74-75.）『ハイラスとフィロノウスの対話』からの引用は、次のテキストから *Dialogues*, p. 123. のようにページ数のみで引用箇所を示した。*Three Dialogues between Hylas and Philonous*, ed. by Jonathan Dancy, Oxford University Press, 1998

⁹ 『人知原理論』から引用には以下のテキストを用い、*Principles*, Part1.1, p. 103. のように引用パート、節とページ数を示した。*A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*, ed. by Jonathan Dancy, Oxford University Press, 1998

¹⁰ *Principles*, Part1.3, pp. 103-104.

¹¹ *Principles*, Part1.8, p. 105.

¹² ここで用いられている *conceive* という動詞は、もちろん *concept* 概念と近い関係にあるのは、同じラテン語源を持つことから明らかであるが、ここでは概念的な操作というよりもむしろ、心像ないし想像力を扱っているものと見なさないと、ここでのバークリーの議論の理解に支障をきたすものと思われる。これは例えばバークリーによるロックの一般抽象観念の批判が、専ら心像的なイメージを軸にしてなされているという点を考慮しても納

得が行くものと思える。この点にかんして、ロックの一般抽象観念とパークリーによる“unfair”な批判を扱った古典的な著作としては、R.I.Aaron, *John Locke* (2nd ed.), Oxford University Press, 1955, pp. 195-197. を参照されたい。

¹³ 以下に続くものと同じ議論が、『対話』においても使用されている。「フィロノウス：君は延長と運動の観念を、[一次・二次性質の] 区別をする人々が二次的と呼ぶすべての性質の観念から、分離することが一体できるのかね？」(Dialogues, p. 79.)

¹⁴ Essay 2.8.9

¹⁵ Essay 2.4.1

¹⁶ ラッセルなど、大方の哲学史の記述がこの議論が決定的な一次・二次性質の論駁であると判断していることは、本論の初めで確認した通りである。

¹⁷ 代表的な論文として、P.Alexander, *op. cit.*, p. 62.; J.Campbell, “Locke on qualities,” in *Locke*, ed. by Vere Chappell, Oxford University Press, 1998, p. 69. 等が挙げられる。例えば、アレグザンダーは「ロックは、パークリーが間違った土台から批判を始めて以来、様々な側面において、ひどく誤って伝えられてきている」と指摘しており、またキャンブルによれば『人間知性論』第2巻8章におけるロックの一次・二次性質の区分は、何世紀もの間、誤って伝えられてきた長年の哲学的な問題」であり、「性質の種類の間にロックが展開した区分は注意深いものであり、かつ整合的」と評されている。

¹⁸ Essay 1.1.2

¹⁹ 知覚表象説とは、物は知性には現前せず、それを表象する観念のみが知性の直接の対象である、とする説である。ロックの知覚表象説を検討する代表的な論文には、J.L.Mackie, *op. cit.*, chapter 2 “Representative Theories of Perception” を参照されたい。

²⁰ 17世紀の自然哲学者たちは皆、この世界が粒子から成っており、自然現象における変化が(ボイルの場合)粒子組織の変化によるものだと考えていた。ボイルの粒子哲学の理論的主著としては次のものが挙げられる。Robert Boyle, *The Origin of Forms and Qualities* (1666), in *The Works of Robert Boyle*, vol.5, London: Pickering & Chatto, 1999, pp. 281-335.

²¹ ロックは一次性質と一次性質の観念、二次性質と二次性質の観念とを分け、前者では類似の関係が成り立つが、後者においては類似の関係が成り立たないことを論じている。この点については、Essay 2.8.15 を参照。

²² ここで論じられている、心の中／心の外という言い回しや、心の中に観念を引き起こすといった言い方は、ロックが知覚の因果説を受け入れていたことを前提としている。知覚の因果説とは、我々の知覚が、外界の事物が私たちの感官に作用し、それが動物精気(animal Spirit)の運動となって脳にまで達し、そこにある心の中で観念を引き起こすことによって成り立つという考えかたである。ロックは2巻でも到る所でこのような生理学的説明を述べている。cf. Essay 2.3.1, 2.8.4, 2.8.12, 2.9.3

²³ 実際、ロックが一次・二次性質の区別を譲り受けたボイルは、こうした科学理論の分かり易さ、単純性、包括性などといった基準を論じ、彼の粒子仮説が優れていることと理由としている。Robert Boyle, *About the Excellency and Grounds of the Mechanical Hypothesis*

(1674), in *The Works of Robert Boyle*, vol.8, London: Pickering & Chatto, 1999, pp. 99-116.

(あおき しげゆき／京都大学)